

けやき

1986.12.12

No.207

埼玉音鑑宣伝部

大宮市仲町3-65

☎ 0486-42-2390

労音・埼玉音鑑 第262回例会

埼玉第九合唱団第27回演奏会

ベートーベン

〈曲 目〉

- ベートーベン
「交響曲 第九番 合唱付」
ニ短調 OP125
- スメタナ
交響詩「わが祖国」より
モルダウ



指揮者のプロフィール

オンドレイ・レナルド

1974年、ハンガリー・ラジオテレビ局主催の
国際指揮者コンクールで第3位入賞。
1962年より、スロヴァキア・ナショナル劇場
の指揮者。
ブラチスラヴァ（チェコスロヴァキア）の芸
術アカデミー卒業。

第九

のタベ



- 指揮 オンドレイ・レナルド
- 管弦楽 新星日本交響楽団
- 合唱 埼玉第九合唱団

〈ソリスト〉

- ソプラノ 水ノ江友吏子
- アルト 玉敷やよい
- テノール 白石邦憲
- バス 桜井直樹
- 合唱指導 宮寺 勇
- ピアノ 田尻 桂

1986年

12月12日(金)

開場 6:30

開演 7:00

大宮市民会館大ホール

出演者のプロフィール



指揮
オンドレイ・レナルド

チェコスロヴァキアのプラチスラヴァの芸術アカデミー卒業。1964年の卒業コンサートでスロヴァキアを代表するスロヴァキア・フィルハーモニーを指揮する。在学中から合唱、オペラ、アンサンブル、オーケストラなどで活躍。1974年ハンガリーラジオテレビ局主催の国際指揮者コンクールで第3位。1962年より、スロヴァキア・ナショナル劇場の指揮者。1970年プラチスラヴァのラジオシンフォニーオーケストラの指揮者となり現在、首席指揮者。1975年スロヴァキア音楽基金からFrico・Katenda賞を受賞。同オーケストラと、あるいは客演として、国内はもとより、ソ連、ポーランド、西ドイツ、東ドイツ、ブルガリア、スペイン、ハンガリー、イギリス、イタリア、カナダなどへの演奏旅行をおこない、その音楽性、楽天性は各地で熱烈な評価を得ている。

レパートリーは、現代スロヴァキア作曲家の交響曲やオペラをはじめ、古典派やロマン派、後期ロマン派までもふくんでいる。レコーディングやテレビでも活躍中。

日本へは1979年初来日、今年で4回目となるが、第九やドヴォルザークの《スターバト・マーテル》や、オルフの《カルミナ・ブラーナ》などを指揮し好評。

管弦楽・新星日本交響楽団

「聴く人々に喜びと“明日”を与えるすぐれた音楽を創造したい」と音楽大学出身の若い音楽家を中心に、1969年に創立。演奏家がみずからの情熱と意欲をもちよってつくられたオーケストラは、おそらく世界にも類がなく、顧問の山田一雄をはじめ、内外の有名な指揮者ソリストを迎えての定期公演、二期会などのオペラ団、ソビエト国立「ホリショイ」「レニングラード」など、内外のバレエ団と共演。テレビ・FM

への出演、鑑賞団体例会、ポピュラーコンサート、親子コンサート、学校公演、室内楽公演など全国に及ぶ年間200回をこえる演奏活動を続けています。



ソプラノ
水ノ江友吏子

国立音楽大学卒。原田茂生、嶺貞子両氏に師事。1982年NHK洋楽オーディションに合格。1983年第30回文化放送音楽賞受賞。オペラは二期会「真夏の夜の夢」が初舞台、以降「魔笛」、日生オペラ「オルフェオとエウリディチェ」他に出演。第九、メサイア等で活躍。

二期会準会員、'85労音第九オーディション合格。



メゾソプラノ
玉敷やよい

武蔵野音楽大学卒。洗足学園マスタークラス声楽科修了。中山悌一、伊原直子両氏に師事。オペラは「靈媒」のマグム・フローラ、「子供と呪文」の長イス。「カルメン」のメルセデス、「ヘンゼルとグレーテル」のヘンゼル等をレパートリーとしている。1986年春、ミラノに留学。オペラの勉強中で将来が期待されている。二期会準会員。'85労音第九オーディション合格。



テノール
白石邦憲

武蔵野音楽大学卒。三池三郎、ロドルフォ・リッチに師事。1974年～1978年イタリアでA・カッラーラ氏に学ぶ。ヌシェーナキジ音楽院夏期講習に参加しファヴァレット、カンポガッリアーニ氏に学ぶ。第14回日伊声楽コンクール第1位。シシリー島エンナ市国際コンクールに入選。ローマ、トスカナ地方でコンサート、ヴェローナでテレビに出演。帰国後、「蝶々夫人」のピンカートン、「ドン・パスクワーレ」のエルネッ

ト、「ボエーム」のロドルフォ、「愛の妙薬」のネモリーノ等に出演。又、第九のソリスト、多数のコンサートに出演。1979年イイノホールでリサイタルを行い好評。二期会会員。'85労音第九オーディションに合格。



バリトン
桜井直樹

東京芸術大学卒。同大学院ソロ研究科修了。畑中良輔氏に師事。1975年藤原歌劇団「セビリヤの理髪師」のバルトロでデビュー。その後「奥様女中」「暗い鏡」「ツアイーデ」等に出演。1977年秋、イタリアに留学、ローマ・サンタ・チェチーリア音楽院に入学、発声をベディコーニ、オペラをダンツェロ、演技をゴヴォーニの各氏に師事。学内オペラ公演「村の音楽教師」「椿姫」等に出演、オペラ科終了。

1980年藤原歌劇団「真珠採り」にズルガで出演後、再渡伊、アルフレード・クラウス、ニコラ・ロッシ・レメーニ、カヴッラ・モレルリの諸氏のもとで研鑽を重ねた。ベルリーニコンクール、バルセロナ・マリアカナルスコンクール、ウィーン・ドイツリートコンクールなどの国際コンクールに入賞。又、ローマを中心にイタリア各地で演奏会に出演。1984年2月のローマ市主催イタリア文化庁後援のリサイタルを最後に帰国し10月にイイノホール、1985年6月大阪マタイ文化ホールでリサイタル。藤原歌劇団の「カルメン」のダンカイト、「マノン・レスコート」の軍曹に出演。'85年労音第九オーディションに合格し、第九公演で好評。「メサイア」でも指揮者アルフィーネより絶賛される。NHK FM出演、藤原歌劇団団員。



合唱指導・宮寺 勇

玉川大学卒業後、ウィーンに留学。指揮ヘルムート・リリング、佐藤功太郎、声楽は牧野統、石垣良彦、森明彦、ピアノは三村精一の各氏らに師事。東京芸大大学院にて指揮法の研鑽を積む。現在、春日部女子高教諭。埼玉県合唱連盟理事。1983年より埼玉第九合唱団の正指揮者となり好評を博している。

ピアノ伴奏・田尻 桂

桐朋学園大学ピアノ科卒業。第5回埼玉県新人演奏会に出演。現在、伊奈学園総合高校教諭。1984年より、埼玉第九合唱団ピアノ伴奏者の重責を果たしている。

合唱・埼玉第九合唱団

1973年、埼玉音鑑の呼びかけで結成され、埼玉県内で初めてベートーベンの「第九」を演奏。以来毎年暮の埼玉音鑑第九例会に出演し今年で14回目となる。

その間、毎年夏には独自の演奏会等を開き、ラフマニノフ「鐘」、ブッチーニ「ミサ・ディ・グロリア」（以上日本初演）をはじめ、モーツァルト、ヴェルディ、フォーレの三大レクイエム等を演奏。1980年埼玉県より文化ともしび賞受賞。1986年第29回埼玉県合唱コンクールに初出場で総合1位、知事賞、全日本合唱連盟理事長賞、文化団体連合会賞を受賞。

正指揮者に宮寺勇氏、顧問に田尻明規氏をおく。

ソプラノ

柳屋恵美子、渡辺宏美、西川富貴子、大熊礼子、田子裕子、星美江、宮崎直美、菅原浩美、宮森典子、長沢旬子、佐藤恵美子、野本喜代子、山野井山美子、萩原妙子、泉名雪子、松岡圭子、宮崎久子、原礼子、大橋由香、平野寿美、山口昌子、打田より子、坂本和恵、車塚恵子、富沢泰恵、入沢節子、風間陽子、井浦ひとみ、北川玲子、道庭美幸、原田恵子、小林和子、大嶋文子、小池尚美、矢野安恒子、栗田美智子、堀江君江、植島玲子、芦田靖子、三村啓子、小林節子、嶋野洋子、

中山明子、島田靖子、関根恵美子、新井あや子、渡辺めぐみ。

アルト

藤巻朋子、奥原典子、功力尚子、沢原光、保坂純子、根岸弘子、角田まみえ、後藤喜久子、黒川琴枝、大井睦、小島浩美、八木橋弘子、山表美香、大山みさ子、兵美千世、多田ゆかり、加藤静枝、大沢英子、金子久美子、斎藤愛子、鈴木紀子、幕田多賀子、谷島あい子、和田智子、宮本優子、草谷智意子、桜井閑子、安富英子、石田美代子、太田美鈴、高野康代、小池栄子、井出清子、神前よし江、牛島美保、高橋素子子、石原綾子、西谷かさね、大沢綾子、中村姚、小沼佳子、内藤啓子、

三宅洋子、内山恵美子、武田真奈美、坂口真澄、溝田真弓、堀江尚子、小口美樹、平井多美子、三浦千鶴子。

テナー

大熊勝則、栗田広明、坂本宗男、南哲郎、三村隆男、金沢利則、堀富雄、牛駒孝、松井俊治、米本敬一、浅子元、新祖章、大野起一、犬塚大蔵、吉岡正夫、森泉清一。

バス

西川裕二、本橋正吉、瀬島裕二、道口直樹、中峰直紀、青柳輝和、大崎裕久、榎本法夫、鎌田明、望月悦育、福島幸夫、渡辺清、中村誠一、延原浩明。

音楽史上の偉大な改革者ベートーベン

今年も12月には、ベートーベンの第九が各地で演奏されます。埼玉では、秩父でも初めて公演の予定の他、来年には久喜と鳩ヶ谷でも春頃公演の予定です。

音楽旬報社の調査では、今年の第九は全国で221回の公演数にのぼると云います。

この第九について、大阪在住の音楽評論家・出谷啓さんに一筆よせて戴きました。（大阪新音乐会報より）

『第九』は全人類に語りかける。

—— 従来の枠を破った交響曲 ——

ベートーベンをご存じの通り音楽史上の偉大な改革者であり、本当の意味での巨人だった。彼の行った改革は、古典の形式を大きく打ち破ったこと、そして従来の特権階級の為の音楽から、広くマスを対象にした音楽を生み出したことなどが挙げられよう。古典の形式の打破については、音楽の規模の拡大、楽章間の切れ目をなくし、有機的な曲のつながりを編み出したし、楽器編成を大きくして、音の厚みを増したのなどが、その功績と言えるだろう。この「第九」はその意味で二つの要素を結合した大作である。

まず交響曲に合唱を導入し、シラーの賛歌をうたうことによって、かつては、神や王侯を賛美した音楽を、全人類に語りかける音楽に変革した。そして最終楽章

でこれまでの楽章の主要主題を回想させ、しかも60分を遥かに越える長時間の大作に仕上げたのである。更に楽器編成も二管編成に加えて、コントラファゴットやトロンボーン、多くの打楽器を追加させるなど従来の交響曲の枠を大きく破る、新しい総合的な交響曲を生み出したのだった。

だが改革者ベートーベンも時代の子であり、また一介の人間だったことも忘れてはならないだろう。「第九」のような傑作も決して、彼一人の創作だった訳ではない。交響曲に合唱を加えるという発想は、既にナポレオン時代のフランスの作曲家、バエールやメュールの作品に前例があったし、唐突に合唱を加えるには彼自身にも抵抗があったらしく、シラーの詩に入る寸前に彼自身の下手くそな詩をくっつけて、一つの言い訳を試みている。「友よこのような音ではなく、もっと新しい歌をうたおう」のくだりが、それだと言える。つまり最初からベートーベンには、合唱付きの大作を意図していたのではなく、三つの楽章で言うべきことは言い尽くしたと、白覚していたのだろう。だが彼もやはり時代の子で、交響曲の終楽章をアダージョで終わらせるには、こだわりを持った。そこでミサ曲の「クレード」のような形で、フランス式の合唱交響曲を最後にくっつけたというのが、恐らく真相だったように

思う。

ベートーベンの言い訳癖は有名で、「月光ソナタ」で第一楽章をソナタ形式で書かなかった時には、わざわざ「幻想風ソナタ」と注釈をつけたし、「田園」交響曲で各楽章に標題を付け、しかも第4楽章から第5楽章まで、切れ目なくつなげた時も、「音楽としてではなく、より感情の表現を」といわずもがなの注釈を試みている。つまり「月光」の場合は普通のソナタで

はありませんよ、と言うことにより保守的な同時代人の非難をかわし、「田園」では単なる描写音楽ではないと、力説したかったに違いない。

考えてみるとベートーベンは、偉大な改革者であった一方で、極めて小心で傷付き易い人間的な弱さも持っていたということだろう。崇め奉るだけでは、何も見えては来ないのだ。（でたに・けい）

スメタナ・交響詩「わが祖国」より“モルダウ”

チェコスロヴァキアの国民主義的音楽の祖といわれるスメタナは、愛国的精神をもってそうした傾向を促進させたが、その管弦楽曲における代表的作品が6曲からなる交響詩「わが祖国」です。

全6曲の初演は、1882年11月5日にプラハでおこなわれました。そして、この6曲はスメタナの命日に開幕される〈プラハの春〉と呼ばれる音楽祭の初日（5月12日）に、必ず毎年チェコ・フィルで演奏されており、又、この音楽祭の最終日には、必ずベートーベンの第九が演奏されています。

「わが祖国」の6曲の中でもっとも有名なのが「モルダウ」です。モルダウは、プラハ市を流れてゆく河の名で、標題に忠実な音楽の流れや品のいい描写的書

法、親しみやすい旋律などのため、大変多くの人に愛されています。

曲は、8つの部分からなり、まずモルダウ河の2つの水源を暗示する曲が、フルート、次はクラリネットで描かれ、管弦楽が厚みをまして河巾の広がり示しなめらかに流れてゆく様の曲がでてくる。次の部分は森と狩を描き、次に楽しげな田舎の踊りがこだまする。

そして夜、月の光と妖精の踊り。やがて夜が明け河は次第に聖ヨハネの急流にさしかかり、波はしぶきをあげてとび散る。ここから河はプラハ市に入り壮大な流れとなり、やがて古城ヴィシェフラトが見えてくる。河はゆったりと流れてプラハ市をすぎ去ってゆく。

労音オーディションは第九演奏会のマンネリ化に警鐘！

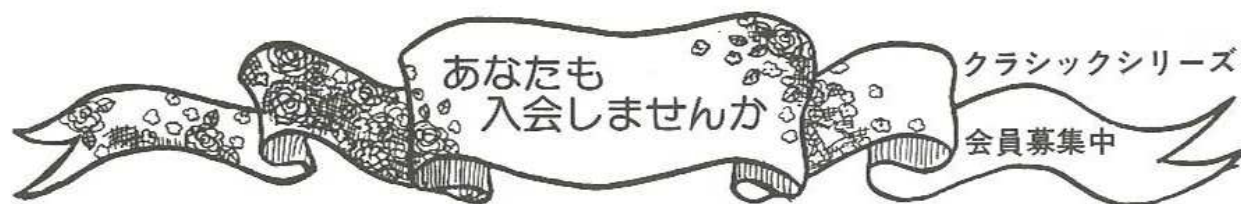
全国労音は昨年5月2日に第九ソリストのオーディションを行ない、審査員は柴田陸雄、五十嵐喜芳、岩城宏之、石丸寛、高田唐吉（労音）の5氏が担当、応募者は、ソプラノ17名、アルト9名、テノール5名、バス6名で、合格者は、今年、大宮公演出演の4人とソプラノ・羽根田宏子の皆さんでした。

労音のオーディションは過去にもオペラなどで行なわれ、優秀な新人の音楽界へのスタートとなってきました。

「第九のように傑出した音楽会が、毎年暮れに沢山の人々によって行なわれることは大変すばらしいこと

ですが、それが習慣化した恒例行事でなく、逆に年ごとに創作意欲にうら打ちされた感動の新しい表現として、どうしても実行に移さずにはいられなかった演奏という姿で登場して、はじめて十全の意義を担うものでありましょう。今年の第九は今年の心を噴出させねば意味がありません。とすれば、こんどの労音オーディションは、最もマンネリ化しやすい独唱の部分に、主催者の創造意欲をそそぎこんで、あらためて第九演奏会の意義を問い直し、マンネリ化してゆく方向に大きな警鐘を鳴らした画期的な行事といわねばなりません。」（大木正興・音楽評論家・1982年12月・記）

月々1,000円の会費で年6回、一流の音楽会を指定席で!



ナマの音楽こそ本物であり感動があります。

音楽との出逢いは無限・幸せの扉を叩くのは あなた!!

労音は、「良い音楽を安く、多くの人々と、ききつづけよう」、「企画運営は会員の手で」、「日本の音楽を育成しよう」と1949年に生れた音楽鑑賞団体で、音楽会を金もうけの手段としてではなく、人間を豊かにする文化活動と考えています。労音は、全国各地にあって、その例会に参加した人々は、1986年で8,000万人となりました。

今、大企業や自治体による音楽会が急増しています。私達は、国民による自主的活動による文化こそが本流であると考え、多くの音楽家、音楽ファン、会員と共に、日本の音楽文化の発展、文化行政の抜本的改善をめざしています。

会員。誰でも1人でも会員になれます。入会金1,200円と会費2ヶ月分2,000円(小中高生は1,600円)を納入し、会員名簿に記入して下さい。席は指定席で、御家族、友人の分も申込むと並んだ席がとれます。(但し、会員以外は一般料金です。)

券の粉失の場合は、再発行します。券の追加申し込みの時は、初めの席をキャンセルし、並んだ席に交換します。

例会の10日前までに、次の例会の会費を納入し、例会日に座席券を受けとって下さい。ただし、座席は、サークル会員を優先し、地域ごとに順々に決めます。

会費の納入は、例会場にて、又は、事務局へ、又は、郵便振込を御利用下さい。

郵便振込の時、口座No. 東京1-194785 口座名、埼玉音楽鑑賞協議会 と御記入下さい。

サークル、会員が3人以上(3家族)になるとサークルを作れます。サークル名、代表者名、副代表者名、会員名を事務局にお知らせ下さい。

サークル代表者会議は、月に1回開く予定ですので、会員の方々の御意見・御希望をまとめて、必ず御出席下さい。今後の企画、プログラム、会費、席割り、等々について協議し決定しています。

サークルを作りたいが身近に会員がいない方には、近くの会員の方々を御紹介します。音楽会の感動を共に語り合ったり、サークルの活動を通して相互に人間的成長を図りましょう。

運営する楽しみを、良い音楽をもっと多くの人へ広めよう!と熱意のある方は誰でも…労音は、あなたの英知と行動力を求めています。例会当日の手伝い、企画、編集、宣伝、各種の事業活動など、幹事になって楽しく、生き甲斐のある人生を多くの仲間と共にすごそう!

賛助会員、全国労音の機関紙「月刊音楽」代こみで年間15,000円(入会金サービス)、年6回指定席。の賛助会員に、ぜひ!